Eine Blume ist ein Garten zu bl?hen

篠宮　かおる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｅｉｎｅ Ｂｌｕｍｅ ｉｓｔ ｅｉｎ Ｇａｒｔｅｎ ｚｕ ｂｌ?ｈｅｎ

【Ｎコード】
Ｎ３４５２Ｙ

【作者名】
篠宮　かおる

【あらすじ】
調子に乗って、お引っ越し作第二弾。
かなり加筆修正して、（する予定だし、しないとマズイ。）連載していきます。
他サイトからのお引っ越しです。
以下、あらすじになります。

私は全てを偽り、あなたの妻になります・・・――。

相手は１６歳年上の若き青年伯爵。
偽りの幼き妻の片恋物語。

◇偽りの誓い（前書き）

本当に連載しても良いのでしょうか？

◇偽りの誓い

？？これは、生き長らえる為の、神に叛く、偽りの誓い・・・。

蒼い海に悠然と浮かぶ五大大陸の内、一際文化や伝統が他の大陸より発展を遂げている、レイレーニア大陸。

そのレイレーニア大陸の国土の大半を占める『ルードベルク王国』が、今から始まる悲しみと偽りが交錯し、それでも愛を貫きを通した恋物語の舞台である・・・。

ルードベルク王国は王都・レナに本部を構える、聖シーシア大聖堂教会。

遥か昔、まだこのルードベルクが建国される以前より前に、その当時の人達が創ったと言われている、清楚な中に、華やかさと知性を感じさせる様式美を持つ最古の聖堂。

その大聖堂で結婚式を挙げるのが、結婚適齢期を迎えた年頃の少女達の夢であり、勿論、私もそれを本気で夢見ていた。

けれど。

大聖堂に厳かに朗々と響く司祭様の声を聴き、考え、思うことは、これから私がしようとしている、罪深くも恐ろしい偽りの誓いを立てる事。

頭では仕方のない事なのだと、やらなければならない事なのだと理解はしている。でも、どうしても私に残った最後の良心がそれを

許さず、受け入れる事が出来ない。

そうしている間にも、式は特別大きな問題なく、淡々と進んでいたようで、名前を呼ばれた事で、私は我に返った。

「ローザ・シンシア・・・？どうなさいました？」

ローザ・シンシア。それが今の私の名前。

司祭様の私の態度を訝しむ声と、隣と、この結婚事態を良く思わない人達からの冷たい視線。

それを見なくても感じてしまえるのは、私がずっと周囲の視線と機嫌を伺い、潜りぬけ、今日まで生きてきたから。

（もう、あと戻りしないって、あの日、決めた。）

きゅっと、きつく唇を噛み、萎え掛けていた野心を叱咤し、この日の為に、これからの生活の為だけに身に付けた、完璧な微笑みを顔に浮かべた。

「緊張なされていただけの様ですね。では、式を続けましょう。」

その言葉で、私は怪しまれていない事を知り、また、この結婚式に参列した多くの貴族の席からは、あからさまに私を侮蔑する声も届き、聞こえた。が、私はそれをあえて無視した。

最初から悪意や妬み、羨みからの誹りは覚悟していた。

私、『ローザ・シンシア』の結婚相手は、このルードベルク王国を古くから支え、かつては王妃を輩出した事もある名門貴族の嫡出

嫡男の、クライス・ディル・ハーネスト＝エディエス様、２７歳。
彼は１３家もある伯爵の中で、唯一領地を黒字経営している伯爵家の跡継ぎと言うだけあって、彼、否、彼の家『エディエス伯爵家』と、縁続きになりたいと思っている貴族は多くいる。
そんな彼等からしてみれば、小娘でしかない私は疎まれ、邪険にされても仕方がないし、無理もない。

ヴェールが捲られ、冷たい唇が私の右頬に落ちてくる。
参列した人達から見れば、唇にしているように見えるこの口付けは、この儀式を司っている司祭様から見れば、愛の感じられない、冷たいものだっただろう。

後年、彼はこの日の事を、教皇録に事細かく書き記している。

――あの二人の間に、愛は無く、偽りと野心に満ち、冷たいものだった。
しかし、私はそれを止める事は出来なかった。
政治の世界に腐敗が広がり、蔓延しそうだった当時、私は当時の司教様に逆らえなかった。
彼女は孤独であり、公正であり、強く、弱い、守られるべき少女だった。
私にもっと勇気があり、立ち向かう力さえあれば、未来は違っていただろう。
だが、過去はもう変えられない。
彼らはあの日、偽りではあるが、確かに永久の愛を、無償の愛を誓ったのだから・・・。

――教皇録・ミケイラ・ルスク『過去の過ちの日々』より？？。

その後、式は粛々と進み、親族と仲間内だけのパーティーになり、あの人の周りにはここぞとばかりに人が集まってきたけれど、私の周りには、彼の妹以外来なかった。

「おめでとう、お兄様。??お義姉様、これからよろしくお願いしますわ。」

ピリリとした空気に、心から祝福されていない事が判る。

「おめでとう、クライス。これで君も今日から妻帯者の仲間入りだ。」

皮肉交じりにもお祝いに駆けつけてくるのは、彼の友人知人ばかりで、中には華やかな令嬢もいるけど、

私の知り合いは誰もいない。『ローザ・シンシア』の親も、式が終わるなり帰ってしまった。

（私は、いなくてもよさそう・・・。）

逆にいない方が良いし、盛り上がるだろう。

直感に従い、楽しそうに団欒する彼等の傍を離れ、私は誰もいない大聖堂の中へと戻り、祭壇の前で跪いた。

謝れば、懺悔すれば、全てが赦される事ではない事は解っている。

それでも私には、祈り、赦しを乞う事しか出来ない。

たった一ヶ月前まで、貧民街の孤児の一員でしかなかった私が、今、こうして貴族の令嬢として、偽りの身分で存在している事を。

そうなったのには、私の容姿に関係がある。

白金色の、艶やかで長く、豊かな髪に、菫色の瞳。そして、顔が本来エディエス家の花嫁となる筈だった令嬢、『ローズ・シンシア』様に似ていたから。

ローザ様本人は、結婚が決まっていたにも関わらず、婚約者以外の男性との間に、戯れのつもりで結んだ肉体関係の末、子供を孕んでしまった。

国民の多くがタームル教徒であるルードベルクでは、如何なる身分の者も、身分関係なく、芽生えた命を摘み取る事は、王家への反逆罪と等しい罪状に課せられる。

せめて、身長さえ年齢に相応しく、それなりに低ければ結果は違っていただろう。なのに、私はどういうわけか、年齢の割に身長があり、そのご令嬢に酷似していた。

それ故に私はただ似ているというだけで、一ヶ月で『ローザ・シンシア』と言う貴族令嬢の身代わりとなり、聖女と神様に偽りの誓いを立てた。

自然と純銀製の十字架を握り合せる両手に、力が入る。床に就いた膝も、決して寒さからだけではない罪深さから、ぶるぶると震える。

一心に祈り、赦しを乞うのは、それだけ恐ろしいから。

「どうか、お許し下さい。」

私が今日、これからやろうとしている事は、国家の転覆をも恐れぬ、天下の大罪。
せめてもの救いは、期間が定まっている事。
――良いか、一年だ。一年、娘としてあの家にいてくれれば、お前の今後の生活は保障してやる・・・。
濁り、淀んだ瞳に浮かぶ狂気に、ほの暗い雰囲気。
野心家とは、あんな人の事を言うのだと、私はあの時初めて理解した。
生きていく為に、貧困からくる飢えから逃れるために交わした契約。
（後悔、しない。）
十字架を握り直し、私は祈った。
「どうか、罪深い私を御守り下さい。」
私は、知らなかった。
この決断が自分自身を苦しめ、悩ませる事になるだろうという事を。
私は、自分より年上の妹が呼びに来るまで、聖女に祈り続けていた。

◇偽りの誓い（後書き）

次回は、気長にお待ち下さい。

◇偽りの領地へ？（前書き）

更新しました。

◇偽りの領地へ？

――人は人を簡単に信じ、裏切り、勝手に期待しては絶望し、逆恨みする身勝手極まりない生物である。――
（『貴族社会の裏と真実』著／ファイシス・レクニール　より）

重たい空気と、肌に慣れない高級な寝具。そして何より厭わしい他人の匂いが、自分の身体から香る事で、浅い眠りから現実の世界へと、簡単に引き戻される。

「お目覚めでございますか」

薄い瞼を何度か瞬きを繰り返し、ベッドの上に上半身を起こせば、気配もなく一人の侍女が、ぬるま湯を張った洗面具の乗せたカートを押しながら現れ、両手で柔らかいリネンを渡してくる。

「えぇ。おはよう。シュリ。」

彼女――シュリは、私が唯一シンシア家から連れてきた侍女で、他の人より浮き離れた雰囲気を持ち、淡々とした物言いと性格から、シンシア家では忌避されていた。

「奥様、ご朝食は如何なさいますか。」

「パンとスープだけで良いわ。」

「では、そのように。」

適温に冷まされたお湯で顔を洗うのは気持ち良い。顔を洗いながらシュリの問いに答えると、シュリは音もなく部屋から出ていき、すぐにホカホカの焼きたてのパンと、作りたての熱いスープが注がれたスープ皿の二つを持ち、部屋に戻ってきた。

そのスープとパンが載せられたワゴンの下には、いくつかの贈り物と、手紙が積まれていた。

今日で結婚して3日目の朝。

そろそろ見返りを求めた賄賂紛いの贈り物が届き始める頃だと、あの家で教わった。そう言ったモノは、全て横流しするように言われている。

（何処まで浅ましいの・・・。）

感じるのは、醜い浅ましさと強欲さに対する嫌悪感。

顔を洗い、化粧を完全に施し終えた私は、シュリしか傍にいないことを良い事に、行儀悪くも、贈り物に付いてきた手紙に目を通しながら、パンを食べ、スープでそれを流し込んだ。

そして何通目かの手紙に差し掛かった時、私の目は、驚愕により見開かれた。

その手紙の文字は、お世辞にも上手いとは言えない文字だったけれど、書かれている内容は一刻も争う内容だった。

ぐしゃりと、無意識に手紙を握る手に力を入れていたのか、手紙が音を立てて鳴った。

私の菫色の瞳は忙しなく文面を走り、唇は強い憤りからふるふると震えていた。

今、私が目を通しているのは、エディエス伯爵家に恨みを込めた決死の嘆願書。

作物が不作だと言うのに納める税金は年々上がるばかりで、また、仕事をしたくても橋作りや道の舗装と言った賦役が多く、生活がままならない。このままでは死んでしまう・・・。

この国では現在、直接領主に意見を言うのは固く禁じられていて、時には領主、ひいては貴族や国王に逆らい、歯向かったとして、斬首か縛り首、火刑に処せられる。

そこまでの危険を知りつつ、冒してでも届けられ、出され、助けを求め、伸ばされた手紙と願い。

これが真実なのならば、このエディエス伯爵家が持ち、経営している領地は黒字ではなく赤字。

（酷い、良くもこんな嘘を・・・！！）

あまりにも酷い、今現在の領地の現状を訴える嘆願書に、私は傍にいるシュリではない使用人を呼ぶ為、呼び鈴を激しく振り鳴らした。

チリンチリン、と、いくら鈴を鳴らしても、すぐ部屋に駆けつけるほど、まだ朝は明けていないし、使用人の動きも早くない。

こうして待っている間にも、領地では何も罪がない子供たちの命の灯が消えかかっているかもしれない。

「――シュリ。」

「はい。お預致します」

私が何も言わなくても、シュリは理解してくれる。

シュリは、今まで私が読んでいた手紙兼嘆願書を私から受け取ると、手荷物の鞄に入れ、大きな鞄には下着の代えやアクセサリー、靴からドレスまで、身の回りの物を手早く詰め込んだ。

それが済んだと同時に、使用人が私に宛がわれた部屋の扉を三回ノックし、開けた。

◇偽りの領地へ？（後書き）

変なところですけど、区切ります。

あちらではいなかった人を、一人増やしました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3452y/

Eine Blume ist ein Garten zu bl?hen

2011年11月11日16時48分発行